

難聴

英語名 : Drug-induced hearing loss

A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるというものではありません。ただ、副作用は気づかずに放置しておくとう重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療をおこなう上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として「副作用の初期症状」があることを知っていただき、気づいたら医師あるいは薬剤師に連絡してください。

「難聴」は中耳炎の方や高齢者によくみられる症状ですが、医薬品によって引き起こされる場合もあります。原因になりやすい医薬品は、ストレプトマイシン、カナマイシン、ゲンタマイシンなどのアミノグリコシド系（抗結核薬）という抗菌薬やシスプラチンという抗がん剤、アスピリンなどのサリチル酸剤という解熱消炎鎮痛薬、フロセミドに代表されるループ利尿剤などです。何らかのお薬を服用、注射していて、次のような症状がみられた場合には、医師または薬剤師に連絡して、すみやかに受診してください。

「聞こえづらい」、「ピーやキーンという耳鳴りがする」、「耳がつまった感じがする」、「ふらつく」

1. 薬剤による難聴とは？

耳は外耳、中耳、内耳に分けられます。外耳、中耳は音、すなわち空気の振動を伝え、内耳はそれを電気信号に変える役割があります。このうち、薬剤による難聴は、医薬品によって内耳が傷害を受けた結果生じます。代表的なものとしてアミノグリコシド系抗菌薬（ストレプトマイシン、カナマイシン、ゲンタマイシンなど）やシスプラチン（白金製剤）という抗がん剤、アスピリン（サリチル酸剤）などの解熱消炎鎮痛薬、フロセミドなどのループ利尿剤によって引き起こされます。このうち、アミノグリコシド系抗菌薬やシスプラチンでは、一旦生ずると治りづらい難聴が生じます。一方、アスピリンやフロセミドによる難聴は投与を中止するとほとんどが正常に回復します。

症状は薬剤投与後に出現し、徐々にひどくなります。難聴のほかには耳鳴りや耳がつまった感じ、ふらつきが生じることもあります。

以下のような方はこれらの薬剤による難聴が生ずる可能性が高いとされています。

○アミノグリコシド系抗菌薬およびシスプラチンによる難聴

- ・ 腎臓の機能が悪い方
- ・ 高齢者

○アミノグリコシド系抗菌薬による難聴

- ・ アミノグリコシド系抗菌薬の使用後に高度の難聴を来した血縁関係者がいる方

2. 早期発見と早期対応のポイント

何らかのお薬を服用又は注射していて、「聞こえづらい」、「ピーやキーンという耳鳴り」、「耳がつまった感じ」、「めまいやふらつき」などの症状に気づいた場合には、すみやかに担当医に連絡し、耳鼻咽喉科を受診してください。急に耳が聞こえなくなる突発性難聴や、長期間大きな音に曝されたことによって生ずる騒音性難聴、加齢による難聴などとの鑑別が必要です。いつからどのぐらいの期間、お薬を内服あるいは注射したかがわかれば、その情報もおもちください。



※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することができます。

(<http://www.info.pmda.go.jp/>)

また、薬の副作用により被害を受けた方への救済制度については、独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページの「健康被害救済制度」に掲載されています。(<http://www.pmda.go.jp/>)